



日本とミャンマーのはざままで

横山 廣子
民博 名誉教授

日本での在留資格が認められず、困難を抱えるミャンマー人家族を描いた本作は、藤元明緒監督の最初の長編作品である。東京国際映画祭アジアの未来部門二冠独占をはじめとして、オランダやバンコクなどの映画祭でも受賞を重ね、国際的に高く評価されている。ミャンマーでは一九六二年から五〇年近く軍政が続き、八八年の民主化運動や僧侶らも立ち上がった二〇〇七年の反政府デモでは、大規模な反軍政活動が展開した。軍事政権下を逃れて国外に脱出する者も少なくなく、本作の家族は二〇〇七年ごろに来日した設定である。父親がミャンマーで活動に参加したことが暗示され、入国管理局の收容から仮放免になったものの、難民申請は却下されたことがわかるが、政治や法律関連の描写は少ない。対照的に丁寧に映し出されるのは、日々の暮らしのなかの家族の会話と表情である。

ドキュメンタリー的質感

モデルになった家族がたどった時間をフィクションとして再構築した作品だが、映画を見た多くの者がドキュメンタリーのように口にする。四人家族を演じるのは、じつの親子である母と二人の息子、母子とは無関係の独身男性で、誰も演技経験はない。しかし実際のアパートの一室で撮影された映像には、「家族」

の空気が漂う。父親役の男性はミャンマーに帰国して、撮影一カ月前に来日し、日本在住の三人とアパートの部屋や近くの公園で多くの時間を過ごし、互いの距離を縮めていったという。だが、それ以上にわたしが注目したのは、役名を演技者の本名と一致させていることだ。父親役のアイセが日本で初対面したのは七歳のカウン、三歳のテツ、彼らの母親のケインであり、カメラが回っていてもいなくても四人の名前に変化はなかった。一種、虚実ないませの感覚が醸成されたかもしれない。



家出してヤンゴンの街をさまようカウン © E.x.N K.K.

「僕の帰る場所」

英題：Passage of Life

2017年/日本・ミャンマー/日本語・ミャンマー語/98分

監督：藤元明緒

出演：カウン・ミヤツ・トゥ、ケイン・ミヤツ・トゥ、アイセ、テツ・ミヤツ・ナインほか

の撮影では、それはしない。事前に各人に渡しておいた台本どおりに、しかし必要に応じて監督が役の人物の心情を十二分に説明し、三歳のテツの場合は喜怒哀楽を操って撮影が進められたようだ。

それらの結果、演技未経験者でも演じているという不自然さがなく、他方、支援者ユウキの來河侑希や居酒屋店主の津田寛治も、プロ俳優

優のオーラを消してドキュメンタリー的質感にはまり込んでいる。

揺れる少年の心

日本での不安な生活のなか、母親はついに倒れて入院する。ミャンマーは軍政から民政に移管して情勢が変化しつつあり、彼女は帰国を決意する。日本で育ち、故郷のこともよくできないカウンと弟は、父を残し、母と一緒に帰ることになる。この映画の中心軸は、ふたつの国のはざまで生きること余儀なくされたカウンの心の揺れである。特に舞台をミャンマーに移した後のカウンの言動が絶妙に配置されていて、それが痛いほど伝わってくる。

空港での「暑い」という第一声、ミネラルウォーターを売りに来た子の眼前で閉めた車の窓、母から

促されてした祖母への拝礼、冷水のシャワー。ミャンマーならではのひとつひとつに対し、彼の心は日本へと向かい、学校のお別れ会でもらったプレゼントを眺め、日本の父との通話が途切れて床に落ちたスマホを祖母が注意すると「うるせえババア」と日本語で毒づく。故郷に戻った母は、市場で買ったロンジー（地元巻きスカート）にはきかえ、サイカー（自転車タクシー）に乗って外出し、頼にタナカ（伝統の天然化粧ペーパースト）を塗って談笑している。それを受け入れたくないカウンは、母のロンジーを切り裂いて隠す。

そしてとうとうカウンの心は、家出という形で爆発する。その前の母とのやりとりは秀逸である。カウンはミャンマー語の勉強を拒み、自分は日本人だと母に言い張るが、両親と同様、あなたもミャンマー人だと言いかされてしまう。「病気が治ったの？ 日本に帰ればいいのに、嘘つき」と小さい声で抵抗した後、「ママなんて、病院で死ぬばよかった」と言い放つ。リュックに大切なものを詰めて家を出て、夜まで帰宅せず、母を心配させる。

映画の最終盤では、家出後のカウンの変化の様子が描かれる。日本人学校への入学も許可され、何とかやっていくだろうと感じさせる結末である。学校へと歩いて行く母子三人の声をバックに流されるエンドロールは、この作品の英題「Passage of Life」に似合っている。本作は移民家族の物語だが、彼らの愛と葛藤を少年の心情を中心に繊細に捉えることで、形は違えど多くの家族に、また誰もが人生でたどりうる多くの経験に、当てはまる普遍性を有し、大きな魅力となっている。



家出の後、父親の実家を訪問する途上、神の宿る樹木を見上げる母子 © E.x.N K.K.